

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 10 号

平成 15 年 2 月 20 日

発行所 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

## ビリー・グラハム「きょうのみことば」より (6)

9 月 1 日

私について来なさい。あなた方を、人間をとる漁師にしてあげよう。 (マタイ 4・19)

イエスご自身が、最初の宣教師であられた。彼は、受動的にすわっていて、たまたま彼の教えに関心を持ったものをご自身の所に来させられたのではない。彼は、病んでいる者、悲しんでいる者、嘆いている者のいる所に出て行き、ご自身の、喜びといやしと救いのメッセージを、詳しく述べられたのである。少年の頃でさえ彼は、宮の中に入ってゆき、古い伝統の中に立てこもっていた博士たちや律法学者たちを、教えられた。彼は、行く所どこにおいても、人々にチャレンジを与え、彼らを根こそぎにし、一変されたのである。しかしついに彼らは、イエスを、十字架につけた。それは、イエスが、彼らの、利己的な難攻不落の、ひとりよがりの生活方式をくつがえらせられたゆえであった。イエスは、宣教師であられただけでなく、また、ご自身の信奉者たちもまた宣教師となることを、保証されたのである！

9月3日

そちらでも、「働かない者は食べる資格がない」という鉄則を、  
教えたはずです。 ( テサロニケ 3・10 )

クリスチャンがキリストに従うにあたって果たすべき責任の一つは、働くことに対して新しい態度をとることである。この上なく多くの若い人々が、責任を取ることなしにキリストを望んでいる。イエスは、社会の脱落者ではなかった。大工として、彼は、ご自身の手をもって、一生懸命に働かれたのである。使徒パウロは、神によって割り当てられたわざをすると共に、生活のために、天幕作りをした。

クリスチャンがする仕事は、どのようなものであれ、主への仕事としてなされる。彼は、その職業がどのようなものであっても、ベストを尽くすべきである。彼は、忠実で、純粹で、正直でなければならない。

9月12日

柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ5・5)

イエスは、その独特な仕方で、この上なくショッキングな、また革命的なことを聴衆に言っておられた。すなわち、「柔和な者は幸いです」と言っておられた。彼は、私たちの現代的な幸福への道とは全く反対のことを言っておられたのである。私たちは、次のように言う。「利口なものは幸いです。その人は、友人たちの賞賛を受けるからです」「積極的な者は幸いです。その人は、自分の希望する職業で成功するからです」「富んでいる者は幸いです。その人は多くの友人と最新式の家具を十分に備えた家を持つからです」と。イエスは、「柔和であれ、そうすれば、あなたは地を相続するでしょう」とは言われなかった。彼は、他の誰よりも、柔和が神の賜物であり、新生の結果であることを知っておられたのである。イエスはこの八つの幸せの中で、命令を発せられたのではなく、また、「あなた方は、柔和にすべきである。それが生活の仕方である」と言われたのでもない。そうではなく、彼は、もし私たちが幸福の秘訣を見だし、生活を楽しまたいと思うなら、「柔和」が基本的なかぎである、と言われたのである。

9月16日

私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。

( コリント1・23 )

今日、教会における大きな必要の一つは、クリスチャンひとりびとりが、イエス・キリストを信じる信仰に関して、熱心になることである。これが、生ける霊的経験の真髄である。使徒達は、キリストと共におり、彼らが見聞きしたことを、あかししないではいられなかった。クリスチャンひとりびとりは、アッシジのフランチェスコ(1182頃 1226)のように、喜んですべてを捨て、気が狂ったように、キリストの大使となるべきである。クリスチャンひとりびとりは、この上なくキリストに心酔し、この上なく聖なる熱情に満たされて、どのようなものをもってしてもその熱心を消し得ないほどになるべきなのである。

パウロの述べ伝えた福音は、彼の時代の人々には、狂気のさたと思われていた。私達は、この狂気を持つとうではないか！私達は、これら初代のクリスチャンが持っていたような、素晴らしい固定観念の幾分かでもとらえよう！私達は、神の御霊に満たされた男女として出て行こうではないか！

9月30日

あなたに向って、私は手を差し伸べ、私のたましいは、かわき  
きった地のように、あなたを慕います。 (詩篇 143・6)

しばらく前、私は、ある大きなアメリカの大学の学生部長を訪問した。私はその学生部長に「この大学における最も大きな問題は何ですか」と尋ねた。彼は、ちょっと考えていたが、「空虚です」と答えた。今日、非常に多くの人々が、退屈し、孤独であり、何かを探し求めている。

私達は、私達の生活における最も深い問題を解決してくれる何かを求めている。しかし私達は、それを見つけていない。ダビデは、「私は、それを見つけました。私は、乏しいことはありません」といった。使徒パウロはそれを、「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました」と、言っている。あなたは、人生をあきらめ、両手を上げて、「無駄だ」と叫ぶ必要はないのである。あなたは、神の平安、神の喜び、神の幸福、神の安全を、持つことができるのである。そして、この世における最も感動的な生活が、あなたのものとなり得るのである。

10月2日

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてください。(ピリピ1:6)

クリスチャンであるということは、日ごとのプロセス それによってあなたが益々キリストに似る者となっていく である。あなたが出発するときは、赤ん坊として、出発するのである。あなたは聖書にある単純な事柄で養われなければならない。そして、あなたは、次第に、あなたのクリスチャン生活において、歩むことを学ぶのである。最初あなたは、倒れたり、多くの失敗をしたりするかもしれない。しかしあなたは成長し続けるべきである。ところが、成長を停止してしまっている人々がたくさんいる。彼らは、一生、霊的な赤ん坊のままである。私は、このような経験が、今日ではごく普通のことではないかと思う。ひょっとするとそれは、あなたの経験であるかもしれない。あなたは、自分の心と生活をキリストにゆだねた日を、記憶しているだろうか。あなたは、勝利を確信していた。あなたを愛してくださったキリストによって圧倒的な勝利者となることは、何と容易に思われたことであろう。今日、キリスト教界における大きな必要は、クリスチャンが日ごとに罪に対して勝利を得る秘訣を学ぶことである。

10月8日

あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがた  
に与える戒めです。 (ヨハネ 15・17)

どのようにして、私たちは、愛すべきであろうか。私たちは、神が私たちを愛されるように、愛すべきである。私たちは神が私たちを受け入れてくださっているように、お互いに受け入れ合うべきである。あまりにも多くの親が、自分達の子供をあるがままに受け入れ、彼らの真価を認めることをおこたっている。あなたが、子供を非難する代りに賞賛してから、どれくらい経っているであろうか。ダビデは、ソロモンのために祈り、日ごとに彼をほめた。そして私達も、わたし達の子どもたちを日ごとにほめるべきである。あなたの奥さんをほめよ。私は、賞賛のほうが非難よりもはるかに効果があることを知っている。人は、ひとりびひとりみな、真価を認められることを必要としているのである。

10月13日

信じており、ことばに尽くすことのできない.....喜びにおどっ  
ています。 ( ペテロ1・8 )

キリストは、悲しみと落胆に対する答えであられる。この世界は、くじかれた希望、破れた夢、そして、むなしくされた願望の世界である。G・K・チェスタートン(1874 1936 イギリスの作家、文学評論家)は、「至る所に、スピードがあり、騒音があり、混乱がある。しかし、どこにも、深い幸福、静かな心はない」と言っている。ハリウッドのある寄稿家は、ある有名な映画スターについて、「晴れやかな、苦勞のない輝きは、彼女の美しい顔から去ってしまった」と書いている。楽天主義と快活さは、キリストを知ることの産物である。もし心が、キリストを信じる信仰によって、神に波長を合わせられているならば、それがあふれ出るとき、喜ばしい楽天主義となり、素晴らしい快活さとなるであろう。あなたは、神に同調するのでなければ、決して、失望落胆から開放されることはないのである。キリストは、幸福と喜びの源泉であられる。ここに、クリスチャンの喜びの秘訣があるのである。

10月16日

私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。(詩篇84・2)

寂しさは、人々が今日直面している最大の問題の一つである。それは、自殺の主要な原因でもある。人々は、いろいろな種類の寂しさを感じている。最も一般的なものの一つは、孤独の寂しさである。あるいはまた、苦難の寂しさがある。多くの人々が、社会における寂しさを経験している。あるいはまた、悲しみ、罪責、さばきの寂しさもある。私たちはみな時として、神に対する寂しさを感じている。ある人が、それを宇宙的な寂しさと呼んでいる。私たちは、それが何であるかを知らない。それは、私たちから、落ち着きを除いてしまう。ご存知の通り、人は、神のために造られている。それで、神なしには、人は寂しいのである。

しかしイエスは、私たちの心の戸をノックしておられ、「入りたいのです。入らせてください」と言っておられる。彼は、無理にその戸を通り抜けることはなさない。私たちが自分でそれを開き、彼を招き入れねばならない。私たちがそうする時、彼は、永遠に住むためには言ってこられ、私たちは、決して寂しさを感じることはない。